
Master Out

頼富直人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Master Out

【Nコード】

N0742D

【作者名】

頼富直人

【あらすじ】

26歳の冬。忘年会の2次会で訪れた初めてのダーツバー。そこで見たダーツの大会のDVD『burn・invitation 1』。3年後、男はその舞台の上に立っていた。

ブローグ

手足が震える。
喉が渴く。
吐き気がする。

そんな中、僕は思っていた。

『3年前に初めて見たDVDの舞台に…まさか自分が立てるなんて。

』

何度も経験してきた事なのに、今日もいつもと同じ。
何度経験しても慣れないものだ。

僕は込み上げる吐き気を、4重に重なった紙コップに入ったウーロン茶で押さえつけ、眩しく光る舞台へと足を進めた。

客席には、1席1万5千円のプラチナシートをゲットしたマニア達。
そして数人の僕の仲間達。

『ダーツを始めて…本当に良かった。』

僕はそれだけで十分だった。

レーティング：0（前書き）

初めてのダーツとの出会い。今から思うとコレが無かったら、今の自分は無かった。

レーティング：0

11月半ば。

「おー寒っ！なんか雪が降りそうな寒さ。…ていうか冷たさですね。」

「そうですね、早く2軒目、見つけて入りましょ。」

忘年会には少し早い季節だが、鍋を始めるにはちょうど良い季節だった。

その日は、半年に渡って携わってきた、制御系システム『Falc on』の開発プロジェクトの打ち上げだった。

「あ、あそこに『やる茶』がありますよ、あそこにしましょう。」

中村さんの方が僕よりも早く2次会の店を見つけた。

彼は僕が所属している会社の、協力会社の若手システムエンジニア。ルックスも中身も僕とは正反対の好青年だった。

中村さんと僕は、会社から自宅への帰る方向が同じだったし、同じ開発チームだったので帰る時間が同じになる事も多く、帰りながら話をする事が多かった。

中村さんはよく自分の話をした。

そのせいか、僕は中村さんの幼稚園時代から、今までの生い立ちを大体知っていた。

「…でね、うちの息子が、最寄り駅のホームまで迎えに来ててですね。私を見つけるなり、『ばー』っと走ってきて、私の足に抱きつ

くんですよ。もー可愛くてしょうがないんです。」

「それ、前にも聞きました。可愛いんですね、息子さん。」

「ええ、輝いてます!」

二人ともに肩をすばませ、『やる茶』へ足早に急いだ。

中村さんの話の5割は息子さんの話。

3割はダーツの話。

2割は格闘技の話。

少しだけ奥さんの話。

『やる茶』での会話は引き続き、息子さんの話かと思ったが、違った。

「ところで林さん、この後、ダーツ行きませんか？」

「はい、行きません!…って何度も言ってるじゃないですか。」

この半年間、会社からの帰り道中、4割の確率でダーツに誘われていた。

僕はその誘いについて10割の確率で断っていた。

「楽しいんですよ、ダーツ。行きましようよ。この店の隣の隣の隣くらいにあるんです。ビリヤードも置いてあるから、ダーツが面白くなかったら、ビリヤードしましょう!」

「もー、分かりましたよ。行きますよ。中村さんは明日、ご自分の会社に戻られるんですもんね？お付き合いします。」

Falconの開発については、協力会社の方にも僕の会社内で作業してもらっていた。

半年振りに自社で作業できると、中村さんは喜んでいた。

『やる茶』を出る頃には酒の勢いで、寒さを感じなかった。

中村さんは仕事からの開放感も手伝って、急いでダーツバーの方へ駆けて行き、すぐに姿が見えなくなった。

僕は、彼が走っていく先に、ダーツバーがある事は、何となく知っていたので、記憶を頼りに中村さんの駆けて行った後を追いかけた。

お世辞にもキレイとは言えない雑居ビルの5階にダーツバーがあった。

カウンターが7席しかないのに、ビリヤード台が3台にダーツ台が4台。

店内はバーにしては広くてだいぶ明るかった。

店には客が5人ほど居たが、誰もダーツを投げていなかった。

「さあ、投げましょうか。林さん、ダーツやった事あります？」

「全然無いです。…これを…投げればいいんですよ？」

僕は店においてある、ボロボロのプラスチック製のダーツを4 / 5本持って中村さんに聞いた。

「ダーツは1人3本です。」

「あ、そうなの?」

「あとハウスダーツじゃなくって、僕の持つてるダーツを借しますよ。」

「あ……ありがとうございます!」

たまにタメ口。中村さんは僕に対して決してタメ口を聞かないが、僕は誰に対しても、不意な出来事が起きるとタメ口を聞いてしまう。

「まず、カウントアップってのをやりましょう。一番点数が多いと勝ちです。とりあえず、真ん中の円を狙ってダーツを投げてください!」

「……はい。このテープみたいな所から、足をはみ出しちゃいけないんですよ?」

中村さんは手馴れた様子でダーツ台を操作していた。
なにやらダーツは色々とゲームがあるらしい。

「……よっ!……よっ!……よっ!……上手くないもんですね。」

「初めてですからね、今度は僕の番です。」

3本中3本目のダーツが真ん中に刺さり、ダーツ台から少し大げさな音が鳴った。

ダーツ台上部にあるモニタには『61』が表示されていた。

僕のは『27』だった。

「スゲー、中心に入ってる。上手いじゃないっすか。」

「まあ8ヶ月投げてますからね。」

何ゲームか投げていると、カウンターの方にある、薄型テレビに映っていた画が気になったので、聞いてみた。

「…ん？あれってダーツの試合ですか？テレビに映ってるやつ。」

「あゝそうです。日本トップレベルの選手が出てる大会ですよ。」

「へーそんなのあるんですね。」

僕が今投げているダーツ台とは少し盤面の色が違うみたいだった。どうやらダーツ台には色々な機種があるらしい。

「あれって中村さんよりも上手いんですか？」

「…当たり前です。みんな有名どころの人ですよ。『burn: invitation』っていう大会で、ソフトダーツをしている人達の憧れの大会なんです。」

「なるほど！」

中村さんはダーツが本当に好きなんだなと思った。

その後カウンタアップを数回した後、2人でカウンターで数杯飲んだ。

お互い、ビールは飲み飽きていたので、焼酎の水割りを頼んだ。

飲みながら、彼から借りたダーツを見てみると、金属製の部分に文字らしきものが刻まれていた。

よく見てみると、筆記体で『Falcon』と書いていた。

開発が完了したシステムの名前とダーツの名前が同じだった。

僕は運命染みたものも、ダーツに対しても興味が湧かなかったが、唯一そこだけに興味が引かれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0742d/>

Master Out

2010年10月28日05時11分発行